王寺町文化財調査報告書　第12集

西安寺跡第4次

発掘調査報告書

2017.3

王寺町教育委員会

西安寺跡第4次

発掘調査報告書

序

このたび、王寺町文化財調査報告書第12集を刊行することとなりました。

西安寺跡は、昭和初期から知られている古代寺院遺跡です。2015年に王寺町教育委員会で西安寺跡第3次発掘調査を実施しましたところ、飛鳥・奈良時代に建立されました塔跡を確認することが出来ました。

本書では、塔跡の発見を受けて、西安寺の伽藍を明らかにするために実施した西安寺跡第4次発掘調査の成果を報告しています。

王寺町では、今後も西安寺跡の調査を継続し、住民に親しまれる遺跡として保存・継承していきたいと考えております。

最後になりましたが、調査の実施についてご協力くださいました土地所有者様をはじめ、文化庁、奈良県教育委員会文化財保存課など、関係各所の皆様にお礼を申しあげます。

2017年3月

王寺町教育委員会

教育長　梅野　満雄

例　言

1．本書は、奈良県北葛城郡王寺町舟戸２丁目 4189 番地内において実施した西安寺跡第４次発掘調査について報告したものである。西安寺跡は『奈良県遺跡地図』（奈良県教育委員会、2010 年改訂版）10 B -0001 として登載されている。

2．調査は王寺町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	王寺町教育委員会
	教育長　梅野満雄
	教育次長　乾清　生涯学習課長　谷口誠（～ 2016. 3）、西本貴至（2017. 4 ～）
	社会教育係長　青山幾一　同主事　中俣遼太　文化財係主事　田中宏幸（2017. 4 ～）
調査担当者	同主任　岡島永昌（文化財係長　2017. 4 ～）
	同臨時職員　櫻井恵（同臨時職員　2017. 4 ～）
整理作業	文化財係臨時職員　福井彩乃　補助員　井田葵　松森多恵（奈良大学）
発掘作業	安西工業株式会社
写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、 王寺観光ボランティアガイドの会、荒木浩司、石橋忠治、江浦洋、 狭川真一、清水昭博、鈴間智子、関川尚功、竹内亮、田邊征夫、 平田政彦、山下隆次、吉岡正行、吉村公男 西安寺跡史跡整備活用委員会　菅谷文則、大脇潔、山岸常人、東野治之、 仲隆裕、入倉徳裕、中川忠儀

3．本書で使用している座標数値は世界測地系に基づくもので、水準値はT.P. 値（東京湾平均海面値）に基づくものである。

4．土層の色、遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 23 版』に拠った。

5．図３は王寺町下水道台帳の地形図（1/500）、図４は国土地理院発行の 1/50,000 地形図大阪東南部（昭和 59 年７月 30 日発行）および『奈良県遺跡地図』（2010 年改訂版）をもとに作成した。

6．出土遺物をはじめ調査にかかる記録はすべて王寺町教育委員会において保管している。

7．本書の執筆者名は文末に記し、編集は櫻井恵がおこなった。

本　文　目　次

第１章　はじめに ---------- 1

第２章　調査の内容 ---------- 5

挿　図　目　次

図１　王寺町の位置

第１章　はじめに

図２　石田氏の伽藍想定(『飛鳥時代寺院址の研究』)

図３　調査位置図（1/1000）

図４　周辺の遺跡（1/50000）

第２章　調査の内容

図５　検出遺構平面図・土層断面図（1/50）

図６　深掘土層断面図（1/50）

図７　出土遺物実測図（1/4）

図８　出土遺物実測図（1/6・1/4）

写　真　目　次

写真図版１

舟戸神社遠景（北から）

調査地遠景（北東から）

調査前（西から）

写真図版２

表土除去状況（北東から）

遺構検出状況（南西から）

遺構検出状況（西から）

写真図版３

礎石２検出状況（西から）

遺構検出状況（測量用合成写真）

礎石据付穴検出状況（南から）

礎石１検出状況（西から）

礎石１据付穴断ち割り状況（東から）

写真図版４

基壇端検出状況（北東から）

基壇版築土層断面（南から）

深堀土層断面（北西から）

写真図版５

出土遺物

写真図版６

出土遺物

図１　王寺町の位置

第1章　はじめに

1　調査の契機と経過

先行研究　舟戸神社の境内が西安寺跡にあたることについては、保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』（大和史学会、1932年）、石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』（聖徳太子奉賛会、1936年）などによって昭和初期から知られていた。とくに保井氏は、西安寺跡で飛鳥時代から鎌倉時代までの軒丸・軒平瓦を多数収集し、そうした時代に西安寺が存在していたことを明らかにした。

さらに、保井・石田の両氏は西安寺の伽藍配置についても検討している。保井氏は『大和上代寺院志』において、西安寺の字名があって周囲に比べて約60～90cm高くなっている舟戸神社境内に主要建造物があったと考え、石田氏は『飛鳥時代寺院址の研究』において舟戸神社境内に西面する法隆寺式伽藍があると想定した。

石田氏が法隆寺式の伽藍配置を想定したのには次のような理由がある。まず、氏が塔跡と考えたのは神社拝殿の北東にある径約9mの不整形の隆起で、狛犬から東へ約5.4mのところに明治14～15年（1881～82）頃まで径1.8m以上で、その中央に径約60cmあまりの円形の穴が穿たれた礎石があった。石田氏はこれを塔心礎と考えたのだろう。また、石田氏は神社本殿の南に礎石を掘り出した跡があることや、礎石を発掘破砕していたという目撃談も聞き取っていることから、そこを金堂跡と考えた。そして、地形的に南と東が高くて北と西が低く、かつ神社の西方約30mの田に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西面する法隆寺式伽藍を想定したのである。さらには神社拝殿の西北に幅約5.4m、長さ約18mの帯状の芝地があることにも注目している。これについては何の跡であるのか述べていないが、石田氏が想定する伽藍配置からすれば回廊跡にあたるのだろうか。

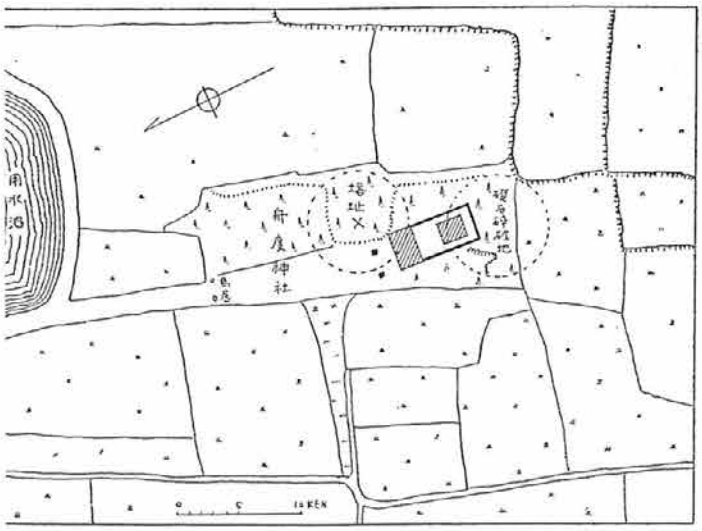


図2　石田氏の伽藍想定（『飛鳥時代寺院址の研究』）

一方、西安寺は文献からもその姿を追うことができる。古くは『続日本後紀』天長10年（833）条に西安寺が大和国広湍（瀬）郡にあると記され、仁安　3年（1168）、弘安4年（1281）にも関係史料がある。そして、貞和3年（1347）には西安寺が興福寺一乗院の庄園であったことがわかり、永正10年（1513）に西安寺北之坊興秀の名が見えるのが西安寺の存在を示す史料の最後である。西安寺は聖徳太子建立の46箇院に数えられる寺院でもあり、別名を久度寺といった。平林章仁氏は『新訂王寺町史』本文編（2000年）において、仁安3年（1168）の「大和国大原吉宗田地売券」に西安寺の地を大原吉宗の先祖が相伝してきたとあることから大原氏を創建者と考え、王寺町久度の久度神社に祀られる久度神が竈の煙出し部分を神格化した渡来系竈神であることから、久度一帯に渡来系氏族の大原史氏が居住していたと考えている。（岡島永昌）

既往の調査　西安寺跡で初めての発掘調査である第1次調査が行われたのは昭和59年（1984）、舟戸神社の西側で計画された共同住宅の建設に伴って奈良県立橿原考古学研究所が実施したものである。この調査では、調査区西端付近で西側の道路とほぼ平行に走る幅約3.4m、深さ約60cmの溝が検出され、報告者は西安寺を取り囲む築地塀の内側に沿った溝ではないかと評価している。

平成23年（2011）には、神社境内の南西で水田法面の擁壁工事に伴って王寺町教育委員会が工事立会を行い、

図３　調査位置図（1/1000）

軒丸、軒平瓦を含む瓦が多く出土した。

第２次調査が行われたのは平成 26 年（2014）である。第１次調査地から道路を挟んだ北西のところで宅地造成が計画され、それに伴って王寺町教育委員会が試掘・確認調査を実施したが、素掘り溝を検出しただけで、西安寺に関連する遺構・遺物は確認できなかった。第１次調査と第２次調査の間を走る南北方向の道路が寺域を画する可能性が考えられる。

平成 27 年（2015）には、王寺町教育委員会が舟戸神社境内において、国庫補助事業による遺跡範囲確認調査を第３次調査として実施した。先行研究によって想定されている中心伽藍の遺構を確認することを目的とし、舟

戸神社の境内で石田氏が塔跡、金堂跡を想定した場所にそれぞれ調査区を設定した。塔跡とされた地点では、2基の礎石と5基の礎石抜取穴、建物基壇、基壇端に伴う石列を検出した。検出した遺構の配置から、礎石抜取穴は心礎および四天柱の礎石の抜取穴、礎石2基は側柱の礎石であり、塔基壇の遺構と評価できた。礎石や礎石抜取穴の位置から推定される柱間は等間で2.15 mとなり、塔身が1辺6.45 mの塔を復元でき、側柱の礎石から基壇端の距離が3.27 mであることから、1辺12.99 mの塔基壇を復元することができる。一方、金堂跡と想定された地点では建物基壇などが確認できないことから、金堂の位置を再考することが必要となった。

第4次調査　第3次調査の成果をうけて、現地の状況を確認すると舟戸神社境内の東辺には、塔跡を覆っている盛土の高まりが南北へ帯状に延びており、神社北側では岬状の飛び出しとなっている。また、舟戸神社境内の東端には2カ所の屈曲する部分が存在する。南の屈曲部分は、昨年確認した塔跡の基壇の南東角の名残を留めたものと考えられる。そして、北に存する屈曲部には、畦がとりつき、現在では通路として利用されている。この屈曲部も建物の基壇の南東角の名残と考えられることから、この部分に金堂跡の存在を想定し、今回の調査区を設定した。平成27年2月1日に作業を開始し、同15日に写真測量を実施し、同22、23日に検出遺構へ養生を加え、埋戻し作業を行い、同24日に現場作業を終了した。　(櫻井恵)

2　周辺の歴史的環境

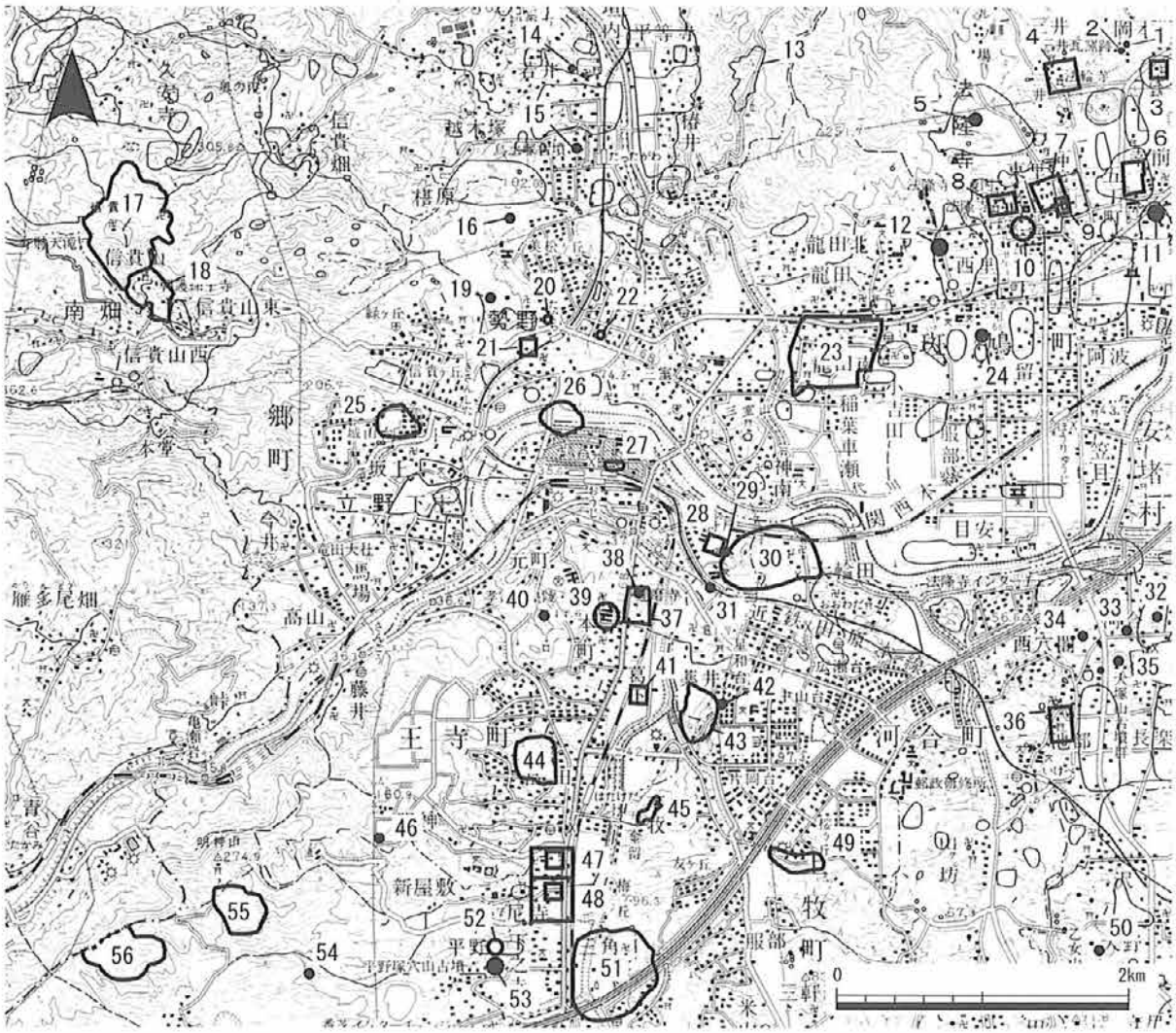
遺跡の地理的環境　西安寺跡（28）にあたる舟戸神社は舟戸地区の氏神で、天児屋根命と久那戸大神が祀られている。神社の創立は定かでないが、久那戸神とは道祖神と同じく道路や旅人などを守る神であるので、地区内を当麻街道が縦断し、その街道が大和川を渡るところに渡し船があったことと関係している。舟戸地区は、近世には王寺村の集落の一つで「船渡組」とも表記された（『新訂王寺町史』資料編387頁）。舟戸地区は当麻街道の渡し船とともに形成された集落といえるだろう。

西安寺跡は、舟戸神社を中心に約120 m×110 m四方の範囲で周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。北へ約250 mに大和川が流れ、東へ約200 m行けば標高約80 mの通称・舟戸山の頂部である。西安寺跡は舟戸山からの谷筋に位置し、自然傾斜して約35 m下った標高約45 mのところにある。周囲の田畑に比べると神社境内だけが1～2 m程度高くなっていて人工的な盛土を予感させる。西安寺跡から西へ約260 mの地点には近世の当麻街道が走っている。

大和川と当麻道　大和川は初瀬川を源流とし、佐保川、寺川、飛鳥川、曽我川、富雄川、竜田川、葛下川など奈良盆地内を流れるすべての川水を集めて亀の瀬を抜け出た後、大阪湾にそそいでいた近世の宝永元年（1704）に川筋が付け替えられるまでは亀の瀬から北西に流れて大阪湾に注いでいた。こうした地勢から、近世には都市大坂と大和の村々を結ぶ流通路として、古代には難波津と飛鳥の都を結ぶ交通路として重要な役割を担った。『日本書紀』推古天皇16年（608）条には隋使・裴世清が難波津から海石榴市を経て飛鳥へ赴いたことが記されているが、その間は大和川が利用されたと考えられている。舟戸山にある舟戸・西岡遺跡（30）は、丘陵頂部に弥生時代後期の高地性集落があったと考えられている遺跡で、集落と大和川の交通を監視する役割との関係が指摘されている。

また、西安寺跡の西を通る街道は、近世には当麻街道や当麻道と呼ばれた。龍田（現斑鳩町）と當麻方面を結び、中近世には法隆寺から達磨寺、そして当麻寺へと巡礼に使われた道でもある。この道は、推古天皇30年（622）に厩戸皇子が斑鳩で亡くなった後に磯長墓まで運ばれた道とも重なり、「聖徳太子葬送の道」として信仰を集めた道でもある。この道が古代にどの位置を通っていたのかは定かでないが、沿道には太子伝説が数多く残っている。

周辺の古代寺院　奈良盆地西部の大和川沿岸には古代寺院が数多く分布している。斑鳩町の法隆寺（8～10）、法起寺（3）、法輪寺（4）、中宮寺跡（6）、王寺町の西安寺跡（28）、片岡王寺跡（39）、香芝市の尼寺北



1 瓦塚1号墳　2 三井瓦窯跡　3 法起寺境内　4 法輪寺境内　5 仏塚古墳　6 中宮寺跡　7 斑鳩宮跡　8 法隆寺西院伽藍
9 法隆寺東院伽藍　10 法隆寺若草伽藍　11 駒塚古墳　12 藤ノ木古墳　13 椿井城跡　14 西宮古墳　15 鳥土塚古墳
16 今池瓦窯　17 信貴山城跡　18 信貴山朝護孫子寺　19 辻ノ垣内瓦窯跡　20 上ノ御所瓦窯　21 平隆寺跡　22 勢野茶臼山古墳
23 龍田城跡　24 斑鳩大塚古墳　25 立野城跡　26 久度遺跡　27 久度南遺跡　**28 西安寺跡**　29 西安寺瓦窯
30 舟戸・西岡遺跡　31 岩才池北古墳　32 城山古墳　33 丸山古墳　34 高山塚1号墳　35 川合大塚山古墳　36 長林寺跡
37 達磨寺旧境内　38 達磨寺古墳群　39 片岡王寺跡　40 馬ヶ脊城跡　41 寺院跡？　42 薬井瀧ノ北遺跡　43 香滝・薬井遺跡
44 畠田城跡　45 片岡城跡　46 畠田古墳　47 尼寺北廃寺　48 尼寺南廃寺　49 下牧瓦窯跡　50 池上古墳　51 木辻城跡
52 平野窯跡群　53 平野古墳群　54 今泉古墳　55 送迎山城跡　56 七郷山城跡

図4　周辺の遺跡（1/50000）

廃寺（47）・南廃寺（48）、三郷町の平隆寺跡（21）、河合町の長林寺跡（36）である。これら古代寺院が創建されたのはすべて7世紀代で、法隆寺若草伽藍（10）が7世紀初頭、中宮寺跡・平隆寺跡・西安寺跡・片岡王寺跡が7世紀前半、法起寺・法輪寺・尼寺北廃寺・同南廃寺・長林寺跡・法隆寺西院伽藍が7世紀半ばから後半と考えられている。　厩戸皇子が推古天皇9年（601）から斑鳩宮の造営を開始し、法隆寺若草伽藍を創建したのは、そこが大和川と竜田道による水陸交通の要衝だからともいわれる。大和川沿岸を通る竜田道沿いには平隆寺も所在し、同様に竜田神社付近で南へ分岐した当麻道のルート上に西安寺跡、片岡王寺跡、尼寺北廃寺・南廃寺が所在する。尼寺北廃寺は発掘調査によって東向きの法隆寺式伽藍配置であることが明らかになっており、当麻道を正面にして建立されたと考えられる。いずれの寺院も大和川による大和の出入り口に付近に建立されており、かつ街道とも関わりをもっていることが想像される。　（岡島）

第２章　調査の内容

１　調査区の設定と層序

西安寺跡第３次調査で検出した塔跡の北方約 15 mの地点で、南北幅２m、東西長 7.5 mの調査区を設定した。調査区の現況は塔跡から続く盛土による高まりがあり、その高まり頂部と西側の舟戸神社の参道付近では約 50 cm、東側の水田とは約 1.3 mの高低差が認められる。調査を進める中、礎石１基を確認した段階で礎石が南北方向にも存するのかを確認するために、東西幅を 1.5 m、南へ 3.5 m、北へ 1.95 m、調査区を拡張した。

調査区は全体的に厚さ約 10 cmの腐葉土に覆われており、これが表土となっている。表土からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、焼土、石材が出土している。その下層は瓦を多く含む盛土である。盛土は、調査区東側の高まり部分で厚さ約 90 cm、調査区西側では厚さ 20 ～ 30 cm程度の厚さがあり、第３次調査で確認した盛土と同様、ブロック、レンズ状に堆積する箇所もあり、人為的に積み上げられたものである。盛土からは、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、青磁、磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、焼土、石材が出土している。盛土の下層では、建物基壇を検出した。厚さ約 60 cmの基壇が版築によって構築されている。基壇の下層には厚さ 25 cm以上の暗褐色土が堆積する。

２　検出遺構

礎　石　南北方向に並ぶ２基の礎石を検出した。礎石１は南北長 85.0 cm、東西長 70.0 cmで直径 53.0 cmの柱座を持つ。礎石の縁辺部分は火を受けて赤く変色しているが、柱座上には直径約 45 cmの火を受けていない部分があり、柱の痕跡とみられる。礎石１の据付穴は平面精査では確認できなかったので、礎石１の南東部分に断ち割りを入れた。その結果、版築での基壇構築途中で深さ 10.0 cmの礎石据付穴を掘削し、礎石を据え付け、礎石の据付け後に再び版築土を加える様子が確認できた。

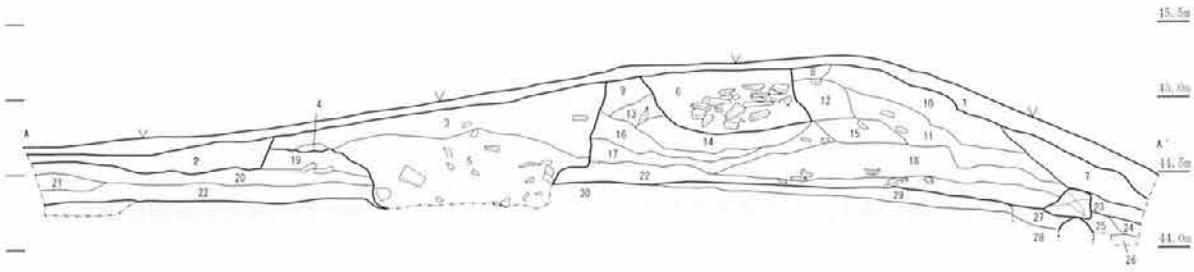
礎石２は、南北長 80.0 cm、東西長 67.0 cmで、明確な柱座の造り出しは認められないが、約 45 cm四方の不整形な範囲で平坦な面が加工されている。礎石の表面のほとんどが火を受け赤色を呈し、礎石の中央部には不整形に黒く変色する部分もある。礎石１と礎石２の芯々での距離は 189.0 cmを測る。礎石上面の標高は礎石１が 44.52 m、礎石２が 44.55 mである。

礎石抜取穴　礎石１の西側約２mで東西長 1.45 m、南北長 1.1 m以上の土坑を検出した。表土層下面から掘り込まれた遺構で未完掘のため深さは 70 cm以上となる。埋土には瓦が多量に混入している。検出した礎石との位置から礎石抜取穴と考えられる。このほかにも礎石１の上方、礎石２の東側でも表土の下面から、盛土を掘り込む土坑があった。地元では、塔心礎を橋の建設資材として使用した話も残っており、礎石の再利用を目的とした掘削の痕跡と考えられる。

礎石据付穴　礎石抜取穴の西側約２mの地点では、東西長 75.0 cm、南北長 75.0 cm以上、深さ 20.0 cmの土坑を検出した。当初、平面では検出しがたいものであったが、断ち割りを入れると基壇の版築をきって土坑が掘削されている状況が確認できた。礎石１、礎石２、礎石抜取穴との距離からみて、礎石据付穴と判断してよいだろう。

基　壇　基壇面は礎石１周辺で標高 44.4 m、調査区西端では標高 44.3 mと約 10 cm低い位置で検出した。西端では礎石も残らず据付穴だけを確認したので基壇面は削平されているものと考えられる。

礎石１から東に 2.0 mの地点では南北方向に並ぶ石列とその東側に盛土とは異なる土の堆積を確認した。石列の東側に堆積する層を 20 cm程掘削したところ、南北長 20 ～ 40 cmの石が５個検出できた。その並びは石の間隔が空く箇所もあり、調査区北壁では２段に積み重なる状況であった。石列の背面にあたる基壇側には裏込め状の堆積土が確認できるので基壇外装である可能性があり、基壇端を検出したといえるだろう。また、石列の外側、



1	10YR3/2	黒褐色	シルト	表土	11	10YR5/6	黄褐色	細粒砂	盛土	21	10YR4/4	褐色	シルト	盛土
2	10YR3/3	にぶい黄褐色	シルト		12	10YR5/6	黄褐色	シルト		22	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト	
3	10YR4/4	褐色	シルト		13	10YR3/3	暗褐色	細粒砂混じりシルト		23	10YR4/4	褐色	シルト混じり細粒砂	
4	10YR4/4	褐色	シルト	礎石抜取穴	14	10YR4/4	褐色	細粒砂混じりシルト		24	2.5Y5/3	黄褐色	細粒砂	
5	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト		15	10YR5/6	黄褐色	細粒砂		25	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂	
6	10YR3/3	暗褐色	シルト混じり細粒砂	撹乱	16	10YR4/3	にぶい黄褐色	細粒砂混じりシルト		26	2.5Y4/4	オリーブ褐色	シルト混じり細粒砂	
7	10YR4/4	褐色	シルト混じり細粒砂		17	7.5YR3/3	暗褐色	細粒砂混じりシルト		27	10YR5/6	黄褐色	シルト混じり細粒砂	基壇裏込め
8	10YR4/4	褐色	シルト	盛土	18	10YR4/4	褐色	細粒砂		28	10YR6/6	明黄褐色	シルト混じり細粒砂	
9	10YR4/4	褐色	シルト		19	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト		29	10YR4/4	褐色	細粒砂	基壇
10	10YR5/4	にぶい黄褐色	細粒砂		20	7.5Y5/4	にぶい褐色	細粒砂混じりシルト		30	5Y4/2	灰オリーブ	細粒砂混じりシルト	

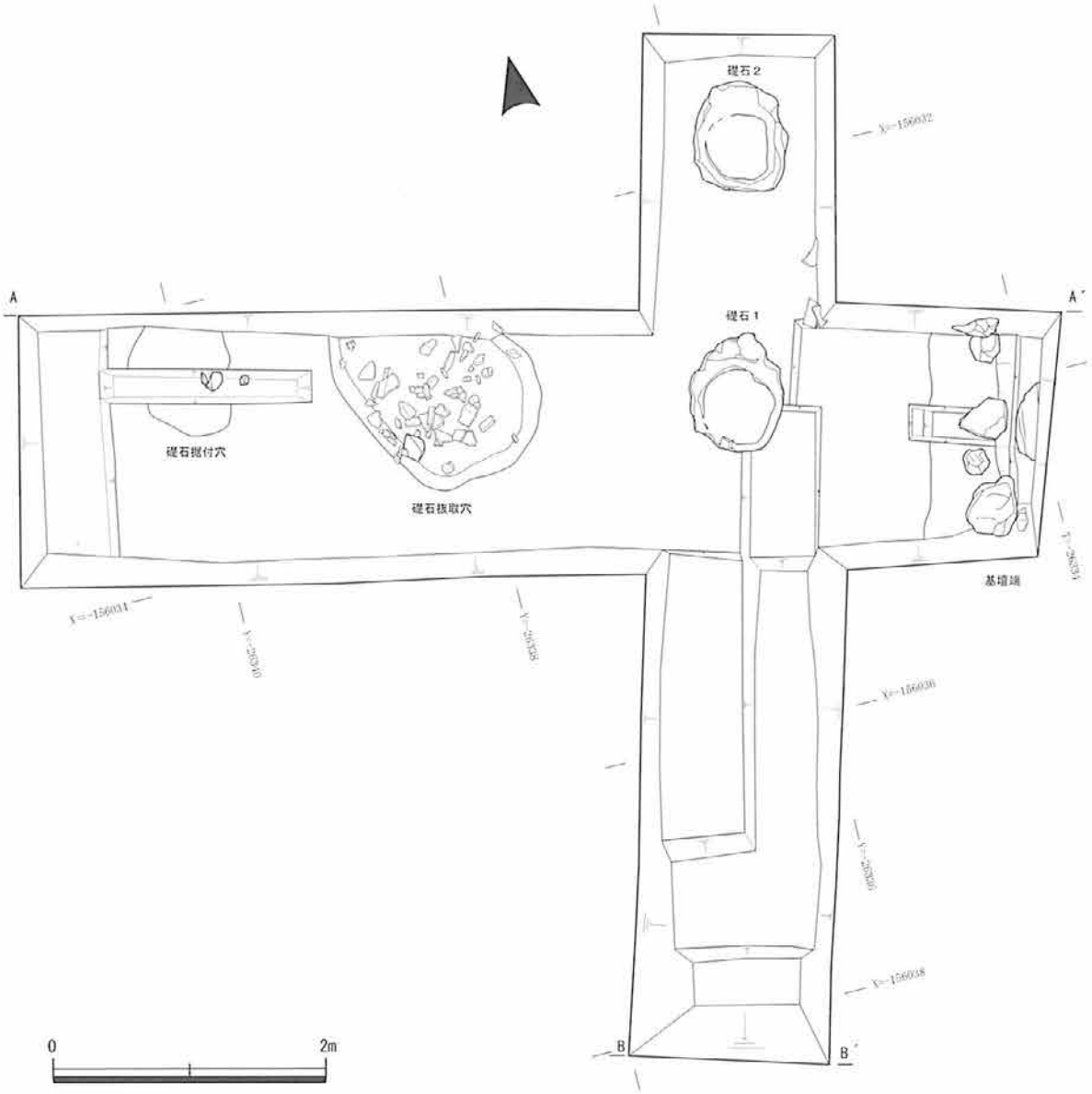


図5　検出遺構平面図・土層断面図（1/50）

調査区の東端では南北長55.0cm、幅15.0cm以上の石があり、その石の上面は水平を保っている状態であるが、石列の東側に堆積する層はこれ以上掘り下げることができないため、現段階で評価することは難しい。

南に拡張した調査区では、基壇の南辺が検出されると思われたが、調査区南端に至っても基壇端を検出することはできなかった。基壇面は標高44.3ｍを測り、礎石１付近の基壇の検出面からは、約10㎝低い位置での検出となっている。このあたりも削平を受け、礎石据付穴等が確認することができない可能性がある。

検出した礎石や礎石抜取穴などから、現段階では東西２間以上、南北１間以上の建物の遺構としか判断できないので、基壇がどのような状況であるのか確かめるために断ち割りを入れることとした。その結果、基壇は4.0～10.0㎝の厚さの層を12層前後積み上げた厚さ約60㎝の版築で構築されていることが確認できた。この版築は南拡張区の南端まで続いているため、調査区南端で深掘を行った。南壁の土層断面で、厚さ約30㎝の版築層とその下層に暗褐色の粘土層が堆積することを確認した。狭い範囲での掘削であったため、この層についての判断は難しく、今後の調査に評価をゆだねることになった。

３　出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ185箱である。そのほとんどが表土、盛土から出土した瓦で、現在整理作業中である。報告する遺物はすべて盛土からの出土である。

軒丸瓦　素弁蓮華文５点、単弁蓮華文６点、巴文35点、文様不明11点、計57点の軒丸瓦が出土している。１は素弁８弁蓮華文で瓦当径は17.5㎝（復元）、瓦当厚は2.2㎝、色調は5PB6/2青灰色、焼成は硬質である。中房径3.4㎝、蓮子は中央に蓮子１個と周囲に４個残存する。中房の周囲には幅0.4㎝の凹線が巡る。蓮弁の外形は凸線で表現され、弁中央には鏑状の稜線が認められる。外縁外側には瓦笵を当てた痕跡とみられる段が残っており、外縁側面は外縁に沿ってなでが施されている。瓦当裏面はナナメ方向のなでで仕上げられている。

２は単弁11弁蓮華文で瓦当径14.4㎝、瓦当厚2.2㎝、色調は5Y6/1灰色で軟質であり、磨滅が激しい。外縁の欠損部分が多いが、珠点が付されていることが確認できる。中房の直径は3.5㎝、蓮子は１＋６である。丸瓦との接合に際して、粘土が多く使用されており、瓦当上半部の器壁の厚さは6.0㎝を超える。３は単弁16弁蓮華文で瓦当径は21.6㎝（復元）、瓦当厚は3.4㎝、色調は5Y8/1灰白色である。外縁は素縁、中房径は8.9㎝と大きく、１＋８＋16の計25個の蓮子がある。４は単弁16弁蓮華文で瓦当径は19.6㎝（復元）、瓦当厚は2.8㎝、被熱しており、色調は7.5YR4/1褐灰色となっている。外縁は欠損部分が多いが素縁とみられる。中房径は6.8㎝、１＋８の計９個の蓮子がある。５は左巻の巴文である。瓦当厚は2.4㎝、色調は5Y5/1灰色で焼成は良好である。珠文帯の内外に圏線、破損した瓦笵の痕があり、第３次調査で同笵のものが出土している。６も左巻の三巴文である。瓦当径14.3㎝、瓦当厚3.1㎝、色調は10YR4/6褐色を呈し、焼成は軟質である。圏線はなく、巴頭の断面形状は扁平で、15個の珠点がある。丸瓦部の凹面には糸切り痕、布目痕、吊り紐痕が残る。７は右巻の三巴文である。瓦当径14.4㎝（復元）、瓦当厚1.8㎝、色調は5Y7/1灰白色で、磨滅が激しい。

軒平瓦　三重弧文13点、唐草文54点、不明５点、計72点の軒平瓦が出土している。８は三重弧文で、色調はN4/1灰色で焼成は非常に堅緻である。瓦当厚は3.9㎝、３本の弧線の幅は同幅に施されており、凹面に布目痕が残る。９は均整唐草文で唐草文が鳥の羽のように展開する。唐草文の上下には珠文が配置されその周囲を凸線が巡る。瓦当厚5.9㎝、色調が7.5YR7/8黄橙色で表面が磨滅しており、軟質な焼き上がりにみえる。10は均整唐草文で、外縁はなく外区には３本の凸線が巡る。曲線顎で瓦当の厚さは4.9㎝を測る。色調は、2.5Y6/2灰

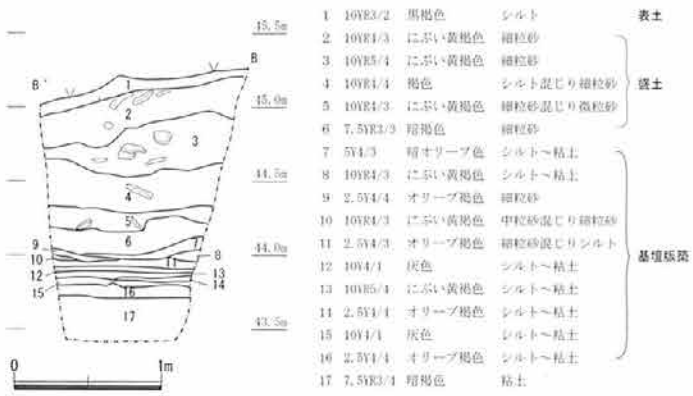


図６　深掘土層断面図（1/50）

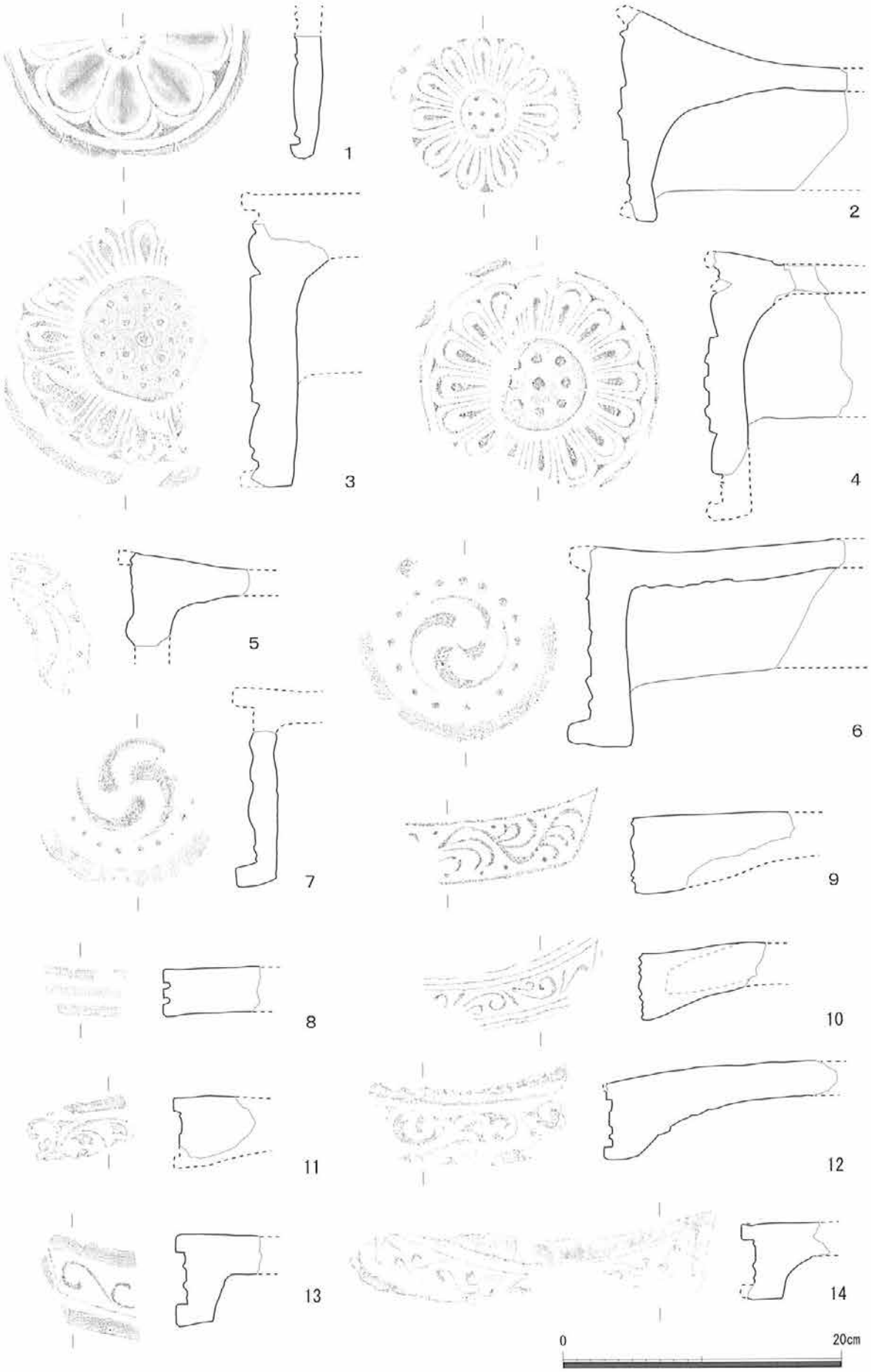


図７　出土遺物実測図（1/4）

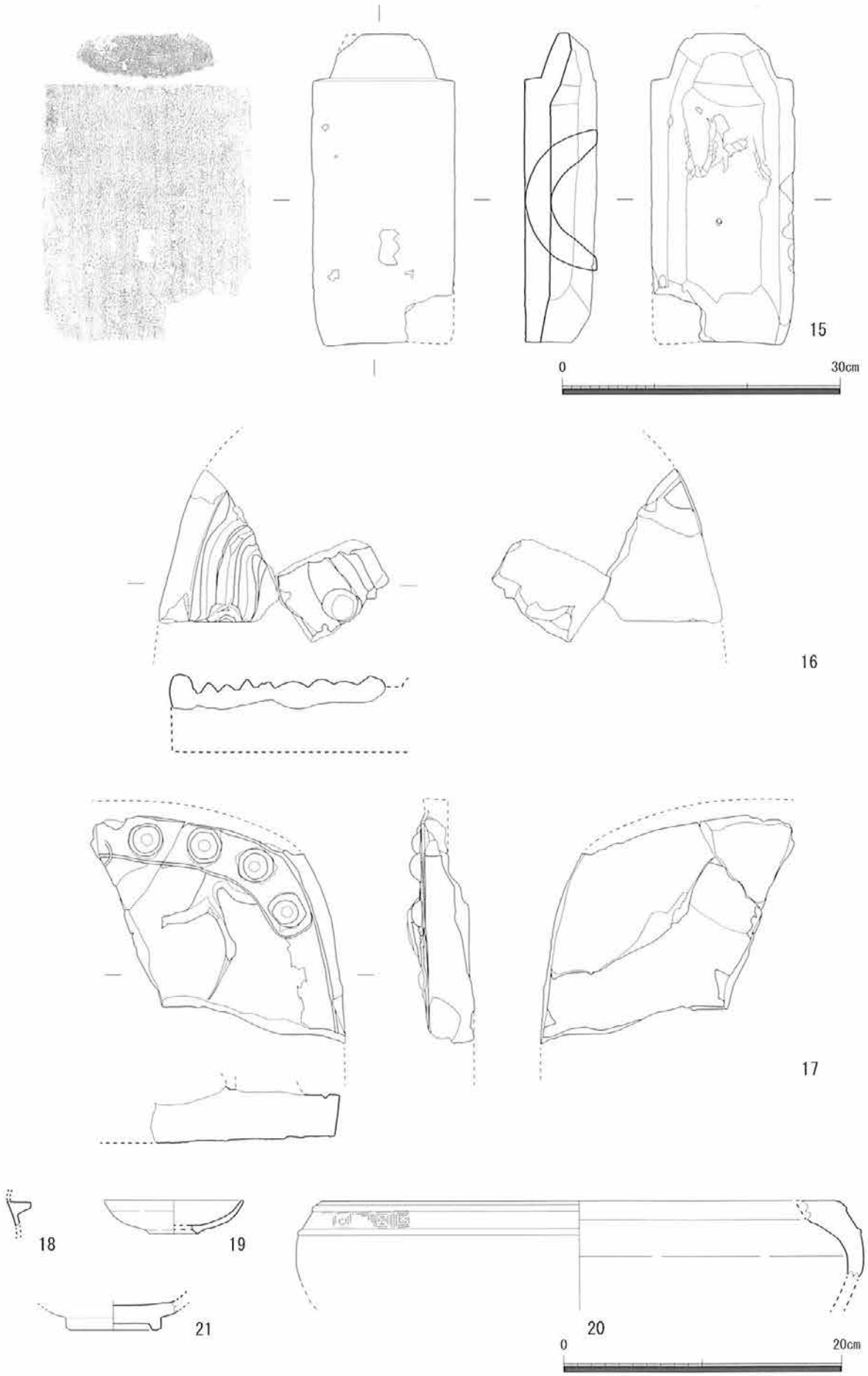


図８　出土遺物実測図（1/6・1/4）

黄色、焼成は硬質である。11は中心飾りのない唐草文で、顎部の粘土接合面で剥離している。色調は被熱のため、10YR6/2灰黄灰色を呈している。平瓦部凹面には布目痕が残る。12は均整唐草文で瓦当厚約5.6㎝。圏線はなく、唐草文様が陰刻で表現されている。色調はN4/0暗灰色で、平瓦部の凹面には布目痕、瓦当縁辺には板状工具によるよこなでが認められる。曲線顎で凸面側には、粘土接合の後に器面調整を行った際の工具の痕跡が残っている。13は唐草文で、瓦当厚6.7㎝で唐草文の外側に界線があり、上部の界線は外縁と接する。段顎で色調は被熱のため10YR6/1褐灰色を呈する。14は唐草文で中心飾りは欠損している。瓦当厚は5.3㎝（復元）、瓦当幅は27.0cm（復元）で、被熱のため色調は7.5Y8/4浅黄橙色である。

丸　瓦　15は玉縁丸瓦で全長33.5㎝、玉縁長4.8㎝、胴部長28.7㎝、胴部幅15.3㎝、胴部高7.8㎝、胴部厚2.8㎝である。色調は10Y4/1灰色で焼成は堅緻である。胴部凸面には縄叩きが施され、胴部凹面には糸切り痕と密な布目痕、吊り紐痕がある。広端側には幅5.3㎝の不明瞭な面取りが施される。室町期のものである。

鬼　瓦　3点の鬼瓦が出土している。16は鬼面文鬼瓦の右眼と巻毛のある側縁部分の破片で、奈良時代のものである。2個の破片はわずかな部分で接合し、裏面は粘土接合面で剥離した状態である。眼は眦が高い釣り目で、眼球は直径2.5㎝、高さ1.5㎝の飛び出しがあり、眼の上には眉毛が認められる。巻き毛は断面三角形の山形に表現されており、外縁側面は縦方向になでが施されている。色調は5Y6/1灰色で、焼成は堅緻である。この鬼瓦は保井氏編集の『大和王寺文化史論』で報告され、現在は天理参考館に所蔵される鬼瓦に接合するものであり、高さ32.8㎝、最大幅33.5㎝（復元）の大きさとなる。17は馬蹄形の鬼板の外縁に沈線に囲まれた中に珠文が並ぶ。板面には顔面を造形する粘土の剥離痕が残り、顔面を手ずくねで立体化させる鎌倉期以降の鬼瓦であろう。板部の厚さは3.6㎝あり、色調は5Y5/1灰色である。

土　器　土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器が出土した。18は土釜の鍔部分。19は瓦器椀。口縁径10.0㎝、高さ1.4㎝で、断面三角形の高台があり、表面は磨滅している。13～14世紀のものである。20は瓦質土器、浅鉢で口縁径は37.2㎝（復元）で口縁下に2本の凸帯を巡らし、その間をスタンプ文で加飾する。15世紀のものであろう。21は青磁碗底部で高台径は6.9㎝（復元）で、見込み部分に装飾は認められない。

焼　土　出土した焼土には、スサが混入するものとしないものがある。その多くは壁土である。焼土の表面は、火を受けたことによって、表面がガラス質に変化し、白色、褐色の色調を呈する破片（22～24）があり、壁土の表面の白土が変質したものと考えられる。壁画を有する可能性もあることから、科学的分析を行う予定である。出土した壁土には木舞の痕跡を留めるものもある。

石　材　花崗岩、凝灰岩が出土している。25～27は凝灰岩である。25は長さ20.0㎝、幅12.0㎝、厚さ8.0㎝あり、色調は10YR8/1灰色で、溝状の掘り込みや穿孔が施されているが、当初の加工であるのか、後世のものであるのか不明である。26、27の色調は7.5Y8/1灰白色で黒色の岩礫の混入が顕著である。

4　まとめ

今回の調査では、礎石2基、礎石抜取穴1基、礎石据付穴1基と丁寧な版築で構築された基壇を確認した。検出した礎石間が約190㎝、基壇の出が約2ｍと確認できただけで、建物の平面プランを復元することは難しい。検出した礎石は平坦面をつくり出し、柱座はあるものの塔跡のそれより小さい点で、塔にくらべて小規模な建物が予想される。しかし、丁寧な版築で構築された基壇であることから、西安寺を構成する主要な建物であったと考えられる。塔跡との位置関係をみれば調査前に想定した通り金堂の遺構であると考えてよいだろう。

昨年行った第3次調査で塔基壇の位置・規模が判明し、今回の金堂と考えられる建物跡を確認できたことは、大きな成果といえる。今後は、金堂の方向、規模の確認を行い、舟戸神社の周囲にも調査範囲を広げ、西安寺の伽藍を明らかにしていきたい。

（櫻井）

舟戸神社遠景（北から）

調査地遠景（北東から）

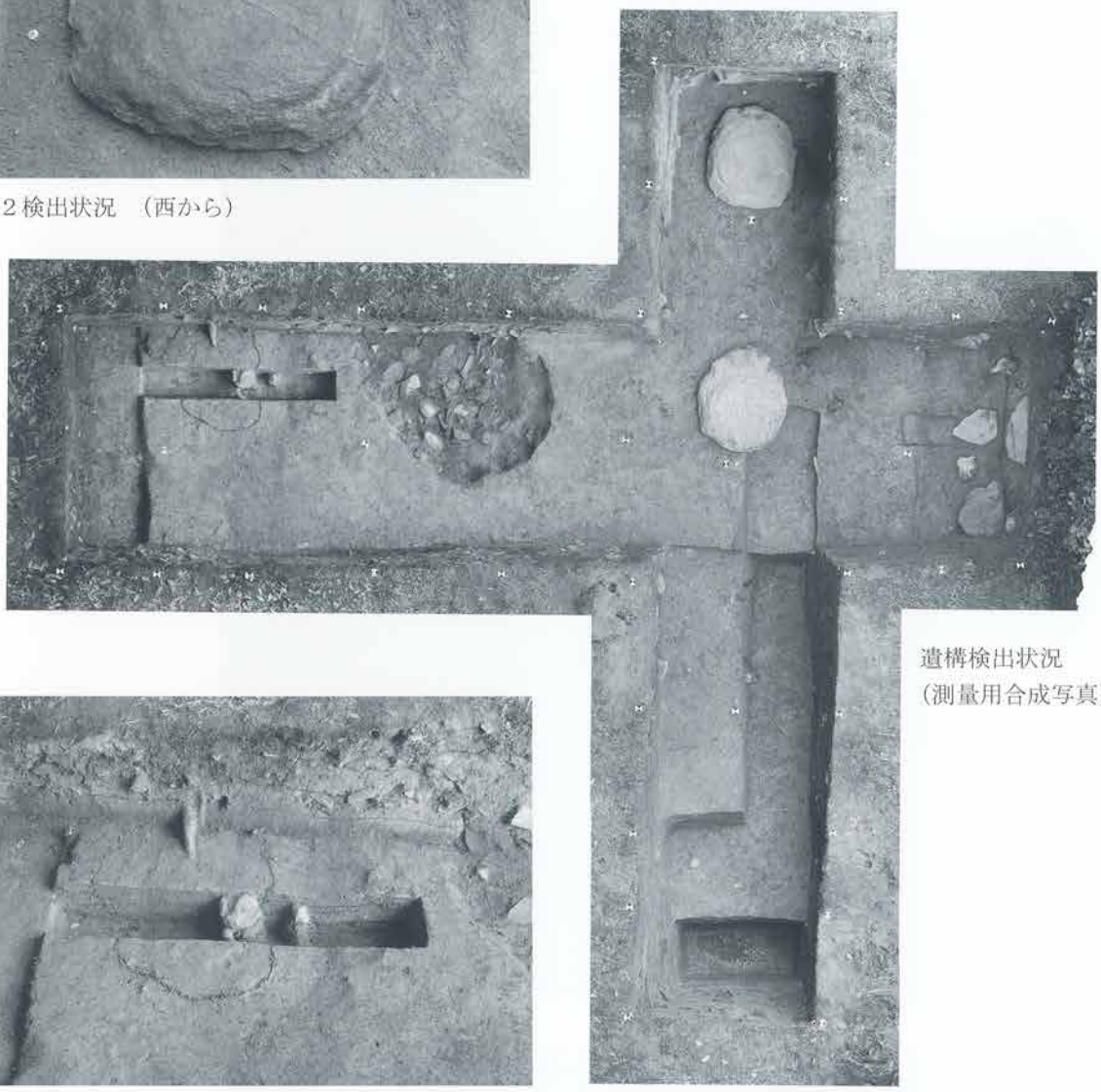
調査前（西から）

表土除去状況
（北東から）

遺構検出状況
（南西から）

遺構検出状況
（西から）

礎石２検出状況　（西から）



遺構検出状況
（測量用合成写真）

礎石据付穴検出状況（南から）

礎石１検出状況（西から）

礎石１据付穴断ち割り状況（東から）

基壇端検出状況
（北東から）

基壇版築土層断面
（南から）

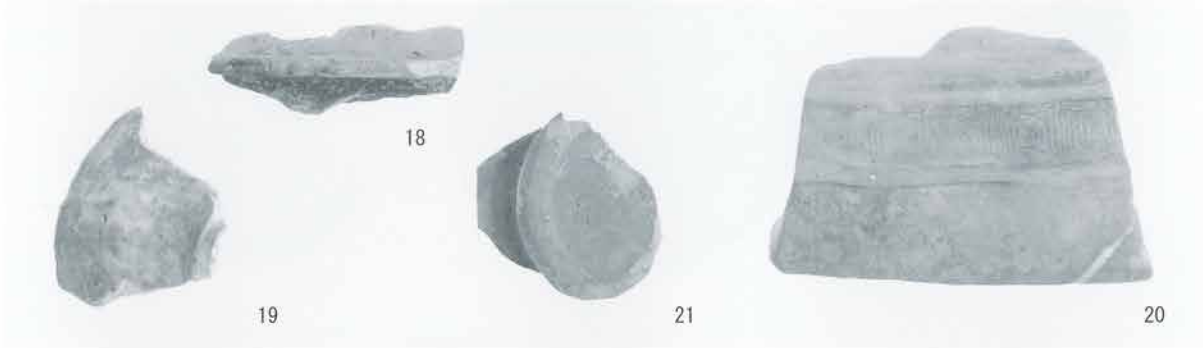
深掘土層断面
（北西から）

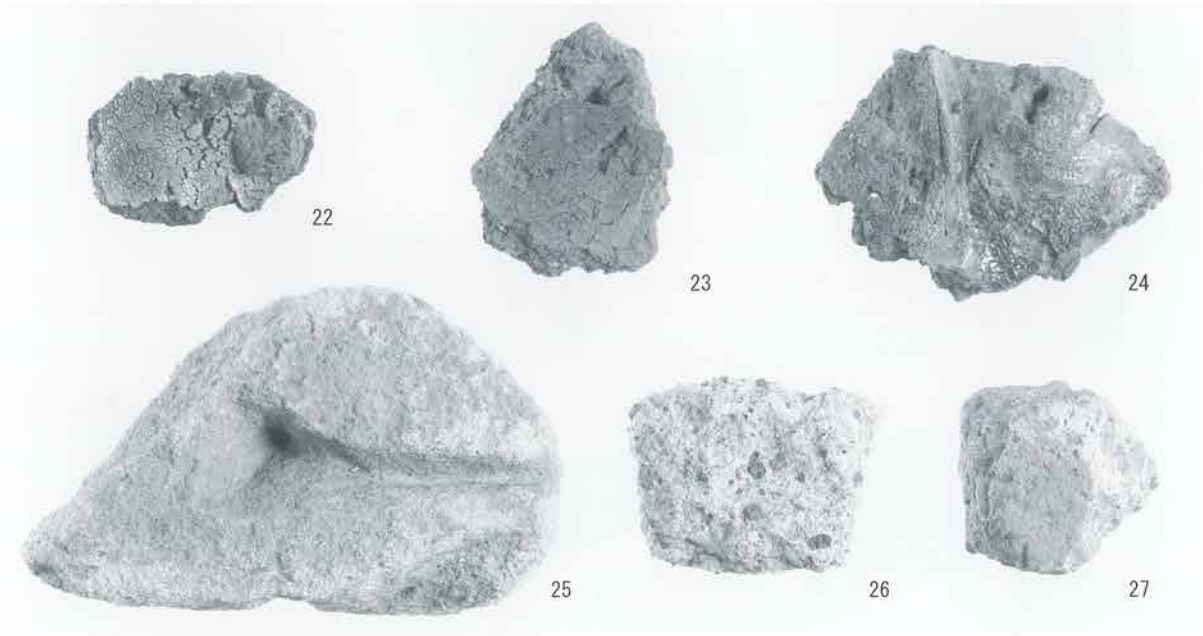
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14

15

16

17





報告書抄録

ふりがな	さいあんじあとだい4じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	西安寺跡第4次発掘調査報告書
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	岡島永昌、櫻井恵
編集機関	王寺町教育委員会
所在地	〒636-0002　奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番18号
発行年月日	平成29（西暦2017）年3月25日

収録遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
西安寺跡	奈良県北葛城郡王寺町舟戸2丁目4189番	29425	10B1	34°35′35″	135°42′46″	2016. 2. 1. ～ 2. 24.	23 ㎡	範囲確認

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西安寺跡	寺院	古代～中世	建物基壇 礎石 礎石抜取穴 礎石据付穴	土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦	金堂跡と考えられる建物基壇を検出

西安寺跡第４次発掘調査報告書

王寺町文化財調査報告書　第 12 集

2017 年 3 月 25 日

編　集　　王寺町教育委員会
発　行　　奈良県北葛城郡王寺町王寺２丁目１番 18 号

印　刷　　株式会社 明新社
奈良市南京終町３丁目 464 番地